オノマトペの多義性に関するスキーマ的分析

呂　佳蓉
京都大学大学院
chiarung@mbox.kyoto-inet.or.jp

0. はじめに

本稿はオノマトペの豊かな比喩表現を認知言語学の観点から分析する研究である。言葉の綾としての比喩表現は、中国最古の詩集『詩経』(B.C.770-B.C.403)に既にみられる(注1)。比喩表現は従来、類似性陳述、類包含陳述、概念構造(Jakobson1956; Lakoff 1987;楠見 1995)の観点から研究されてきた。オノマトペも、これら比喩表現の一環としての研究である。

オノマトペ(擬音語・擬態語)はジェスチャーを伴う言語の「原風景」(Kita 1997:379-415; 喜多 2000:9-21)とされ、「絵画的表現」(矢田部)、「感性のことば」(苧阪 1999:2-10)、また、言語の起源説の根本とも言われる。そこに共通する最大公約数的要素は、オノマトペに関わる象徴性・比喩性といっても過言ではない(筧 1993・山梨 1988:83)。

オノマトペの「比喩性」を考察するには、二段階に分けて考えなければならない。

第一段階:通常、音象徴といわれる段階
第二段階:オノマトペの用例自体が比喩的な用法になった段階

従来サピアを始めとする心理実験や言語学は、第一段階の音象徴に大いに焦点を当ててきた。日本語のオノマトペ研究においては、おおよそ次のように言われる。すなわち、/p, b/は破裂音を描写し爆発的な出来事に使われ、/t, d/は堅さを意味し、打撃の出来事に使われる。また、/k, g/は金属のように堅い表面との接触を表し、/s, z/は滑らかさ、障害の欠如などを表す。/m/ははっきりしない状態を、/n/は柔らかい印象を意味する(Hamano 1998; 田守・スコーラップ 1999)。

しかしながら、オノマトペは、音象徴としてではなく、それ自体が比喩表現として使用されることがある。いわゆる第二段階の用法である。たとえば、「美人にころっとまいった」のような用例である。本稿では、それ自体が比喩表現であるオノマトペの用例に焦点を当てて議論を進めていく。この第二段階を説明するに当たって、比喩研究の大枠を説明する。通常、比喩の種類は、ドメイン間の「類似性」によるメタファーと、時空間の「近接性」によるメトニミーとに大別できる。本稿では、この分類に従い分析を行う。

まず、メタファーが成立するためには、「喩えるもの」と「喩えられるもの」が必要である。特に「心は沼だ」のように具体物を使って抽象性を説明することが多い。次のオノマトペを含む表現にも、メタファーが深く関わっている。

(1) 美人にころっとまいった

この文の背後には、次のような見立て、すなわちメタファーが存在している。

© 呂 佳蓉:「オノマトペの多義性に関するスキーマ的分析」
『言語科学論集』第9号 (2003)、pp. 83-117.

《見立て》
<人の気持>→<転がること>:([転がること]の具体的な側面(様態)): ←[[速い]、[抵抗無し]、[簡単に]…]

図1 心理状態の具体的な見立て

つまり、ソース・ドメイン（source domain）は「転がること」でありターゲット・ドメイン（target domain）は「人の気持」を表す。ころっとモノが転がるように気持が<速く、抵抗無しに、簡単に>美人にまいった、と言い換えることができる。ソース・ドメインとターゲット・ドメイン間に起こるマッピングによって、このメタファーが理解されると考えうる。

次に、メトニミーに関しては(2)のような例文がある。

(2) ご飯をチンする

電子レンジで温める際にチンという音がする→「チンする」＝「電子レンジで温める」電子レンジの普及に伴い、「チンする」という表現も広範囲に理解されるようになった。ここの「チン」というオノマトペはメトニミーとして捉えることが可能である。

1. オノマトペの理解の基盤：五感とスクリプト的知識

1.1 五感

人間の五感（知覚）においては、３つのレベルが考えられており、知覚しやすいレベル３から知覚しにくいレベル１まで、それぞれ(3)のように定義される。

(3) 知覚のレベル（藤岡ら 1983:69-70、順序は原文のとおり）

レベル３：限られた範囲内で閉じた輪郭、すなわち「形」を持つ知覚。

レベル２：特異点とその近くだけが知覚としてのまとまりが強く、しかし輪郭としては閉じていないといった知覚のレベル。

レベル１：輪郭も特異点もまとまってはいなくて、単に「拡がり」だけが「在る」、といったレベルの知覚。このレベルに支えられるイメージは、普通自覚されにくい。触覚のほかに内臓感覚と呼ばれる情報もまた、このレベルでまとめられる。

オノマトペの場合は五感（さらに、共感覚）との関わりが強いことはいうまでもない。様々な研究のうち、まず、大坪（1989:14）の例を挙げる。例えば、「きらきらと輝く（視覚）」「砂ぼこりでザラザラしている（触覚）」「チョコレートがトロリと甘い（味覚）」「おなかがシクシク痛む（内部感覚）」「ゾッとするような恐怖（情緒）」などがある。また、身体的な経験を通して言葉を形成するという説も発達心理学では定説と考えられる(Werner and Kaplan 1963)。

本稿では、五感（聴覚・視覚・触感（体感・皮膚感覚）・嗅覚）を一つの基準として、オノマトペの用例を分析する。

1.2　メトニミー・モデルと理想認知モデル

オノマトペの比喩表現を分析するためには、まず、以下の二つの側面を考慮しなければならない。

1　ヒトの記憶の仕組み

2　事態発生時の音とメトニミー効果

ヒトの記憶の仕組みに関しては、心理学でいう“スクリプト”(Script: Schank & Abelson 1997)や“スキーマ”(schema: Rumelhart & Ortony 1977)、“フレーム”(frame: Minsky 1975)、理想認知モデル(Idealized Cognitive Model: Lakoff 1987)という概念を援用したい。スクリプト的知識とは、日常生活の中でパターン的に繰り返される出来事に関する知識をさす(注2)。認知言語学でいうスキーマと多くの共通点をもつ。いずれも事態の時空間に関わる要素に注目する。Lakoff の理想認知モデルは、事態の成立に関わる前提条件、前半、中盤、後半、終了点の側面を規定する。

イメージの定義に関しては、精神人類学者藤岡喜愛らが分かりやすく説明している。つまり、「これはウメの木、あの声はウグイス。はじめてそう教えられたとき、実物が去ってからも、それは心の中に『或る姿』として浮かんでいる。これがイメージである」(藤岡ら 1983:70)。

イメージと一番関わりの深い知覚は、視覚と聴覚である。そして、音と事態の間に見られる共起関係を、具体例(4)をもって説明する。

(4) イヌが*ワンワン*と吠えた

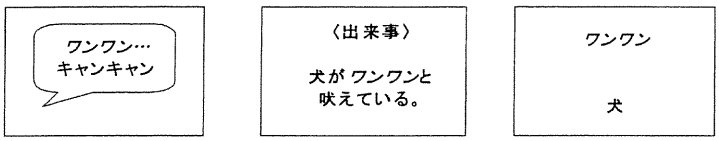


図2　(A)　(B)　(C)

図２（A）の「ワンワン」は、その場に身近にイヌがいてそのイヌが吠えるときに聞こえてくる吠え声、つまりインデックス（index）としてのワンワンである。(B) の「ワンワン」は、イヌが吠えている事態を人間が言語化して伝える際にイヌの吠え声を真似たアイコン（icon）としてのワンワン（オノマトペ）である。(C) のワンワンは、イヌの吠え声「ワンワン」が慣習化され、次第にイヌの名前となり、メトニミー・リンクによるシンボル（symbol）となる。上記のイメージ性に基づき、Lakoff (1987:78)はメトニミー・モデルを発展させた。

(5) メトニミー・モデル：

Given an ICM with some background condition (e.g., institutions are located in places), there is a “stands for” relation that may hold between two elements A and B, such that one element of the ICM, B, may stand for

> another element A. In this case, B = the place and A = the institution. We will refer to such ICMs containing stands-for relations as *metonymic models*.

Lakoffはメトニミー・モデルのほかに、メタファー・モデルやイメージ・スキーマ・モデル、命題モデルなど、合計４種類の認知モデルを立てている。

本稿の目的は、上記に述べたICMの要素（例えば、前提条件、前半、中盤、後半、終了点）を考慮し、さらに事態の「諸側面」に焦点を当ててオノマトペに関わるメタファー・リンクとメトニミー・リンクを解明することである。「ころころ/ころっ」や「ごろごろ/ごろっ」の具体事例を考察し、心理学的／認知言語学的知見から、そのようなオノマトペの比喩の理解プロセス及びオノマトペの多義性を支えるスキーマを解明しようと試みる。さらに、日本語の「ころころ/ごろごろ」と対応する中国語のオノマトペ表現「滾滾（gun gun）」や英語の動詞“roll”との比較研究を通して理解プロセスの普遍性も考察する。また、三カ国語の＜転がるスキーマ＞に基づく意味拡張の方向性の差異についても述べる。

1.3 副詞としてのオノマトペ

オノマトペ表現におけるイメージ・スキーマ分析の重要性を説くために、オノマトペをめぐる従来の品詞論の問題点を指摘する。日本語オノマトペの統語範疇は、従来多様な品詞をカバーしていると考えられてきた。例えば、田守（1993）は、副詞、動詞、名詞、形容動詞・形容詞のように分類する。しかし、オノマトペは副詞として振舞う場合が最も一般的だといわれる。

オノマトペにおける副詞的用法は、結果副詞、様態副詞、程度副詞、時間関係の副詞、頻度副詞などに分けられる。仁田（2002）は、結果副詞と様態副詞を次のように定義する。

> ＜結果の副詞＞とは、動きの結果の局面を取り上げ、動きが実現した結果の、主体や対象の状態のありように言及することによって、事態の実現のされ方を限定し特徴づけたものである。［それに対して］＜様態副詞＞は、動きの展開過程の局面（特にそれに内属する諸側面：動きの勢い・強さや早さなど）を取り上げ、または、主体の心的・態度的な状態を取り上げ、事態の実現のされ方を限定し特徴付けているものである（仁田 2002：35-36）。
> （筆者注：「早さ」は「敏捷さ」の意味であろう）

オノマトペは、特にそのなかの様態副詞、結果副詞との関わりが強いと思われる。通常、様態副詞は「ト語尾」、結果副詞は「ニ語尾」が伴う。しかしながら、その分類は、動詞の性質によるものが大きいと思われる。

(6) a. 雹がばらばら（と）/*ばらばらに降る。
　　b. 金貨がぴかぴか（と）/*ぴかぴかに光る。　（田守 1993:31）

(7) a. 積木の山がばらばらと崩れている。
　　b. 積木の山がばらばらに崩れている。　（田守 1993:32）

田守によると、(6)の「降る」や「光る」という動詞は状態変化を起こさないため、結果副詞と共起できない。しかし、(7)のように、同じ「ばらばら」でも、(7a)のように「ト語尾」を伴う場合は、動作の様態（進行の過程）を修飾するのに対し、(7b)のように「ニ語尾」が動作の結果を表すことがある。このことは、オノマトペにおける「様態副詞」や「結果副詞」の分類が、本来オノマトペの含意ではなく、その語尾（ト語尾/ニ語尾）に影響されるといえよう。また動詞の意味にも影響されている。

では、オノマトペ本来の意味は一体どのようなものであろうか。解明するためには、オノマトペ本来のスキーマを考えなければならない。本稿では、試案として「ころころ/ころっ」「ごろごろ/ごろっ」及び比較研究として中国語の「滚滚」と英語の“roll”を取り上げて考察する。

2.　「ころころ」の事例分析

2.1　辞典による記述

「ころころ／ころっ」に関して、従来の辞典では表１のように記述されている。上段は「ころころ」の記述、下段は「ころっ」の記述である。

『擬音語・擬態語使い方辞典』(1995、創拓社)	『現代擬音語擬態語用法辞典』(2002、東京堂)	『暮らしのことば　擬音・擬態語辞典』(2003、講談社)
① 昆虫やカエルの鳴き声。若い女性の笑い声。 ② 球状のものが連続して転がる様子。 ③ まるく十分に身が詰まっている様子。 ④ 物事が引き続いてたやすく行われる様子。	① 物や丸い物が連続して軽く立体的に回転する様子を表わす。ややプラスよりのイメージの語。 ② 局面が非常に頻繁に急展開する様子を表す。ややマイナスイメージの語。 ③ 音声を直接表す場合は、コオロギやカエルの声の擬音語として用いる。笑い声を表す場合には、主に女性が容易に屈託なく笑う様子を表す。	① 面白いときや楽しいときに出る笑い声。 ② コオロギやカエルの鳴き声。 ③ 小さくて丸みのある物が回転する様子。 ④ 肥えて丸くなっている様子。 ⑤ 容易にことが行われる様子。
① 球状のものが瞬時に一回転する様子。 ② 突然、簡単に、また完全にある状態が成立する様子。	① 球状の物が一回転する様子を表す。ややプラスよりのイメージの語。 ② 局面が急展開する様子を表す。ややマイナスよりのイメージの語。	「ころころ」の①④⑤の類義語。ただ、一回転のさまを表す。

表１

表１は辞典の項目に見られる意味の記述であるが「球状のもの」と「局面の急展開」との間に、どのような関係が存在するのか不明瞭である。本稿では、まず、「ころころ」の多義性を有効に解明するために「ころころ転がるイベント」のスクリプトとスキーマを考える。

事例分析に入る前に、次の議論に関してふれておきたい。つまり、「ころころ」という言葉を分析する際「ころころ」という語彙に意味があるのか、「転がる」という語彙に意味が

あるのか、という問題について言及したい。次の統語テストを試みる。

(8) a. 小石がころころと転がった。
b. ？小石がごろごろと転がった。

c. ？大きいスイカがころころと転がった。
d. 大きいスイカがごろごろと転がった。

(8b)と(8c)のように、「ころころ/ごろごろ転がる」という二つのイベントは異なるため、その意味の違いは「ころころ」と「ごろごろ」に由来するといっても過言ではないだろう。厳密に言えば、類義語ではあるが、それぞれ異なる意味をもつと考えられるからである。

2.2 聴覚—音

「ころころ」の用例の中に、純粋に擬音的な用法が見られる(注3)。

(9) 庭でカエルがころころと鳴いている。
(10) 祐子はころころと笑った。

(9)はカエルなどの鳴き声を指す。(10)は若い女性の笑い声の擬音語や笑い転げるさまを指す。(10)に関しては、本稿で用いた三冊の日本語オノマトペ辞典にも記述があり、インターネット上でも小説の表現として提示されている。しかし、やや違和感を感じる日本語母語話者もいる。英語の giggle に相当すると考えられる。

2.3 視覚—形状と様態

擬音表現だけでなく、視覚の領域でも「ころころ」が使われる。

(11) 小石がころころと転がった。

(11)のような事態を“usage-based”的に何度も経験したのち、われわれは「ころころ転がる事態」に対し、図3のように、ある程度抽象化されたスキーマが抽出される。

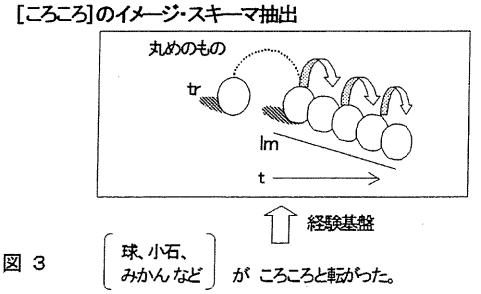


図 3

(11)のような事態を時間軸に沿って考慮すると、図４のようなスクリプト（或いは、ICM）が考えられる。

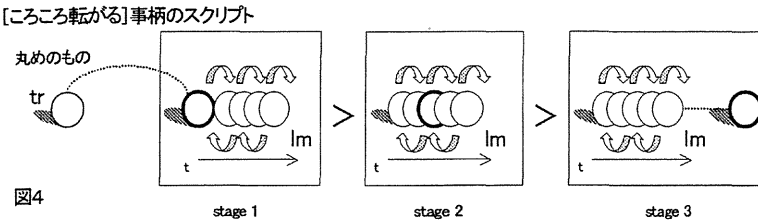


図4

図３と図４において、事態の中の「転がるもの」はトラジェクター(tr)、「地面」はランドマーク(lm)とみなす。そして「ころころ転がる」という理想認知モデル(Idealized Cognitive Model; ICM)を次のように記述する。

(12) ＜ころころ転がる **ICM**＞
前提条件：何か小さくて軽くて、丸みのあるもの(tr)が存在する
前　　半：tr が転がりだす
中　　盤：tr が地面と接触し、少し音を出しながら回転し、連続的に転がっていく
後　　半：tr が徐々に減速する
終 了 点：tr がどこかに停止する

この ICM から、いくつかの側面が挙げられる。すなわち、認知主体が当該事態を認知する際、当該事態のプロファイルされた＜音＞＜tr のかたち＞＜tr の動作＞＜tr の様態＞などの側面である。そのような側面を詳細に文字化すると、(13)のように記述することが可能である。

(13) ＜ころころの **ICM** の諸側面＞
＜事態の音＞：摩擦音
＜tr のかたち＞：丸みのあるもの、小さくて軽いもの
＜tr の動作＞：移動あり
＜tr の様態＞：回転、地面との接触、速度（速い）、連続的

何かがころころと転がるイベントの経験を通して形成されるイメージ・スキーマは、「ころころと転がるイベント」の様態やスピード、形状、雰囲気、参与者の受けた印象などのイメージの総体である（注 4)。そして事態の諸側面を詳述することにより副詞の意味内容への把握も可能となろう。事態の各側面に注目するのは本稿の主張であり、Lakoff の ICM を発展させたところでもある。

2.3.1 「ころころ」— tr のかたちにプロファイル

「ころころ転がる」というイメージ・スキーマは、プロファイルの置かれる場所が移動することにより「ころころ」というオノマトペの意味は多義的になっていく。

(14) ころころとしたジャガイモ。
(15) ふわふわころころの可愛いネコちゃん。
(16) うちのプードルもころころ太ってきた。
(17) えびかぶ団子のころころ鍋。 (料理の分野)

(14)から(17)までの例文を、(13)の<ころころの ICM の諸側面>と照らし合わせてみると、幾つかの側面が欠如の状態であることが分かる。

表 2	ころころの ICM の諸側面	(14)から(17)の「ころころ」の事態
<事態の音>	摩擦音	無
<tr のかたち>	丸みのあるもの、小さくて軽い	丸みのあるもの、小さくて軽い
<tr の動作>	移動	移動無し
<tr の様態>	動態：回転、地面との接触、速度（速い）、連続的	静態

ジャガイモやネコちゃん、プードル、団子などの tr は、すべて静止状態（static）にある。それは、図 5 のように、スキーマの中の tr のかたちがプロファイルされるのである。

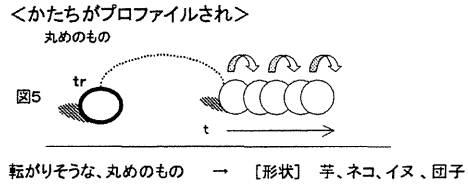


図 5 から分かるように、(14)から(17)の tr は、転がる事態からのメトニミー・リンクによる意味の拡張だと考える。

2.3.2 「ころころ」— tr の動作にプロファイル

(18) ころころと変わる政策
(19) ころころ考えがゆれる人

(18)においては、tr が政策であり tr の動作が「変わる」。(19)では tr が「考え」であり動作が「ゆれる」。tr は具象ではなく抽象である。同じく、(18)(19)の事態を、(13)の<ころころの ICM の諸側面>と照合すると、次のような結果が得られる。

表 3	ころころの ICM の諸側面	(18)から(19)の「ころころ」の事態
<事態の音>	摩擦音	無
<tr のかたち>	丸みのあるもの、小さくて軽い	抽象名詞
<tr の動作>	移動	変化
<tr の様態>	動態：回転、地面との接触、速度（速い）、連続的	速くて連続的

(18)(19)における「ころころ」の意味は、「物のかたち」ではなく、実際の「移動」を表すのでもない。むしろ「変化」の様態を示唆していることに留意しなければならない。「ころころ」の ICM の様態に、プロファイルが当てられる。そして、「移動」から「変化」への転義は、具体的な運動ドメインから抽象的な概念ドメインへのマッピングによるメタファー・リンクだといえよう。これは、Lakoff & Johnson の研究からすでに観察されてきたように、CHANGE IS MOTION と呼ばれるプライマリー・メタファー (primary metaphor)である。

(20) **Change Is Motion.**

Subjective Judgment: Experiencing a change of state

Sensorimotor(感覚運動) Domain: Moving

Ex.: "My car has gone from bad to worse lately."

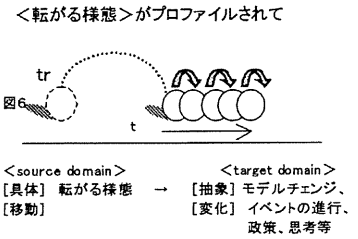
Primary Experience: Experiencing the change of state that goes with the change of location as you move.　(Lakoff & Johnson 1999:52)

人は移動を経験すると同時に必ず何かの変化（風景の変化など）を経験する。この移動の経験をソース・ドメインとして、変化をターゲット・ドメインとして説明することができる。さらに「変化」の意味のほかに、「ころころ」における「連続性」がプロファイルされることもある。[例(21)と(22)]

(21) そうころころ修正されてはたまらない。

(22) ころころ人間が殺されるイラクの悲劇。

(21)と(22)の「ころころ」は、「変化」を含意するというより、「動作の連続性」を含意するというべきであろう。これまで考察してきた(18)から(22)までの「ころころ」の用例を整理してみると、図６のスキーマのようにまとめられる。



2.3.3　「ころっ」— tr の形状にプロファイル

連続性を表す「ころころ」に対して、瞬間性・一回性を表す「ころっ」という表現がある。一般的に動的な事態に用いられるが、静的な事態に用いられることもある。

(23) ころっと太った旬の梅

(24) 白菜はころっと丸くならない

(23)の tr は、梅である。形状から見れば、小さくて丸めのものである。(24)は、「白菜」がころっと丸くならないという。つまり「白菜」の形状と「ころっと丸いもの」の形状とは、異なるのである。このことを表 4<「ころっ」の ICM の諸側面>と照らし合わせてみる。

表 4	「ころっ」の ICM の諸側面	(23)から(24)の「ころっ」の事態
<事態の音>	無	無
<tr のかたち>	丸みのあるもの、小さくて軽い	丸みのあるもの、小さくて軽い
<tr の動作>	移動	移動無し
<tr の様態>	動態：回転、地面との接触、速度（速い）、瞬間的	静態

表 4 の比較を見れば、(23)と(24)の「ころっ」は形状のほうを修飾していることが分かる。このことをもって、「ころっ」のスキーマを元に、(23)と(24)の用例を図 7 のように表す。

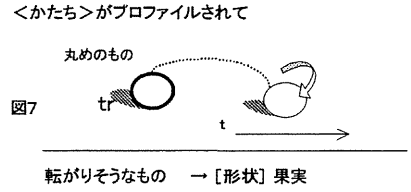


図 7 は、「転がりそうなもの」から「丸いもの」への転義が、メトニミー・リンクによることを示す。

2.3.4 「ころっ」— tr の動作にプロファイル

「ころっ」は、静的な「形状」及び「動作」への修飾が一般的である。

(25) ころっと落ちた
(26) ころっと負けた
(27) 美人にころっとまいった
(28) ころっと信じてしまった
(29) ころっと忘れた
(30) ころっと変わった
(31) ころっといっちゃった（亡くなったという意味で）

(25)から(31)までの「ころっ」と共起する動詞では、(25)の「落ちる」を除いて全て具象性が比較的低い動詞である。(28)の「信じる」や(27)の「(精神的に) まいる」、(29)の「忘れる」は、状態変化動詞である。表 4 の<「ころっ」の ICM の諸側面>と比較してみよう。

表 5	「ころっ」の ICM の諸側面	(26)から(31)の「ころっ」の事態
<事態の音>	無	無
<tr のかたち>	丸みのあるもの、小さくて軽い	人
<tr の動作>	移動	変化
<tr の様態>	動態：回転、地面との接触、速度（速い）、瞬間的	動態：速度（速い）、瞬間的、完全に

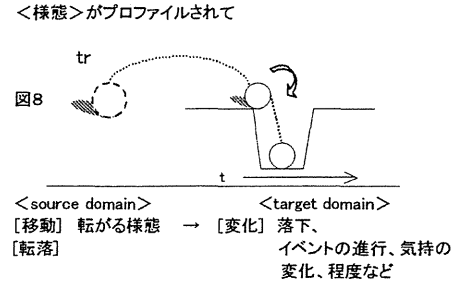
「ころっとまいった」や「ころっと信じた」の例文における「ころっ」は、動作の様態を修飾する。「ころっと転がった」事態のように、＜簡単に、速く＞状態が変化したという意味が示唆される。(30)と(31)は、さらに抽象化が進み、目に見えない「心理的な変化」の表現となった。言い換えれば、(30b)と(31b)となる。

(30) a. ころっと変わった
　　b. 急変した。
(31) a. ころっといっちゃった
　　b. 急にいっちゃった

面白いことに、(25)から(31)はすべて負の方向へ事態が発展した例文であり、「ころっ」という表現は、悪い事態のときに使われる傾向が見られる。そして「ころっと落ちた」のように、「転落」のイメージがこれらの例文の背後に潜む可能性が高い。そこで、もう一つのプライマリー・メタファーが関与している。

(32) HAPPY IS UP/ BAD IS DOWN (Lakoff & Johnson 1999:50)
Subjective Judgment: Happiness
Sensorimotor Domain: Bodily orientation
Ex.: "I'm feeling up today."
Primary Experience: Feeling happy and energetic and having an upright posture (correlation between affective state and posture)

一般的に人間は直立した姿勢が標準である。逆さまの姿勢や転落などは望ましくないことである。この「ころっ」の抽象的な意味はこのようなメタファー・リンクに由来するものであろう。そして、転落するというイメージから、事態が「180 度」転換したという意味が生まれ、(30)の「ころっと」忘れた（すなわち、「完全に」忘れた）ような例文が使用される。上記の用例をまとめて、図 8 のように理解する。



2.4 まとめ

本章では、転がるイベントのスキーマに基づく「ころころ」と「ころっ」という表現がメタファー・リンクやメトニミー・リンクを通して比喩表現として使われる例を考察して

きた。簡単にまとめてみると、表 6 となる。

表6 「ころころ/ころっ」の使用領域分布

ドメイン		意味 及び 簡易スキーマ	具体例	比喩タイプ
聴覚	音	昆虫、カエル、若い女性の笑い声	・蛙がころころ鳴いた	メトニミー
視覚	かたち	軽くて丸めのもの	・ころころとしたジャガイモ ・ころっとした赤ちゃん	メトニミー
	動作	回転しながら移動	・小石がころころと転がった	
	様態	回転、変化	・ころころ変わる ・ころっとまけた ・ころっとまいった	メタファー (CHANGE IS MOTION) (HAPPY IS UP; BAD IS DOWN)

表 6 の「ころころ」の使用領域分布と比喩タイプを参照しながら、図 9 のように、「ころころ」の多義性の意味ネットワークを、ある程度明示することができる。

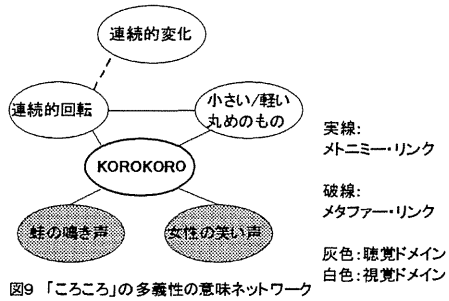


図9 「ころころ」の多義性の意味ネットワーク

一見多義的に理解されるオノマトペ（「ころころ/ころっ」）であるが、その背後には、イベントに関わる様々な百科事典的知識のネットワークとして記憶するイメージ・スキーマのメカニズムが存在する。また、その比喩の理解は、CHANGE IS MOTION や HAPPY IS UP/BAD IS DOWN などのプライマリー・メタファーが関与しているように思われる。

3. 「ごろごろ」の事例分析

3.1 辞典による記述

「ごろごろ/ごろっ」に関して従来の辞典では表 7 のように記述されている。上段は「ごろごろ」、下段は「ごろっ」の記述である。

『擬音語・擬態語使い方辞典』(1995)	『現代擬音語擬態語用法辞典』(2002)	『暮らしのことば 擬音語擬態語辞典』(2003)
① 雷が鳴る音。また雷が鳴るような音。腹や猫の出す音。 ② かなり重量のある物体や肉体が連続して転がる様子。	① 比較的大きくて重いかたまりが連続して立体的に回転する様子を表す。ややマイナスよりのイメージの語。 ② 大きくて重い物が多数散在している	① 雷が鳴っている音。 ② 猫の喉が鳴る音。 ③ 車輪などが転がる音。 ④ 目や喉などに異物を感じる様子。 ⑤ 冷えるなどで、腹の調子が悪

③ 働かないで時を過ごす様子。何もしないで時を過ごす様子。 ④ たくさんありすぎて珍しくも貴重でもない様子。 ⑤ 塊や異物が入り込んでいて違和感を感じる様子。	③ 寝ている意味。有意義なことをしないという意味 ④ 重いものを転がす時に摩擦する音を表す ⑤ 異物がいくつも当たって不快である様子。異物感、不快感。 ⑥ 雷、ネコの喉を鳴らす音など ⑦ 同類のものが多数存在する様子を表す。マイナスイメージの語。客観的に見て価値があるかどうかに関係なく、話者の目から見て同類のものが多数存在している様子を表し、侮蔑の暗示がある。	い時の音や様子。 ⑥ 重いものが転がる様子。 ⑦ 寝る様子。寝返りを打ちながら寝る様子。 ⑧ 何をするともなく、無為に時間を費やす様子。 ⑨ 丸いものや長くて転がりそうなものがたくさんある様子。 ⑩ （⑨から転じて）同じような物や同じ役割を担える人が過剰に存在する様子。
（「ごろっ」の項目がない）	① 比較的に大きくて重いかたまりが立体的に一回転する様子。ややマイナスよりのイメージの語。 ② 無造作に横になって寝る。 ③ かたまりとしての異物感の暗示がある。	① 雷が一度鳴る音。 ② 重くて、大きなものが転がる様子。 ③ 弾みをつけて寝そべる時に使うことが多い。

表７

上記の各欄の意味は互いにどのように関連しているのか、明らかではない。4.2 節以降は、五感を基準にして詳細に各用例を考察する。

3.2　聴覚—音

＜音—雷＞

(33) 雷がごろごろ鳴った。

(34) 昼過ぎから妙に西風が強くなり、空がごろごろ鳴っています。

この「ごろごろ」は、擬音的表現である。ちょうど空が一面黒い雲に覆われて雷雨があるかあるまいかという微妙なところで、ゴロゴロと聞こえてくる。(33)で「鳴った」のは「雷」、(34)で鳴っているのは、「空」である。認知言語学的知見からすれば、空は参照点であり、雷はアクティブ・ゾーン(active zone)である。

＜音—ネコ＞

(35) ネコのゴロゴロってどうして鳴るのだろう？

＜音—お腹＞

(36) ごろごろ。ううっ、アイスコーヒー飲んで腹をこわしてまった…

＜音—車輪など＞

(37) くるまいす　ごろごろ　ごろごろ　がったん　ごろごろ。

(38) カートに載せてごろごろ押していった。

車輪の音の中で最も典型的なイメージは木の車輪で凸凹の道を転がして進む時のイメージであろう。そして、雷の音と車輪の音を同じように聞こえるというのが、大変興味深い。中国でも古くからそう考えられていた。古代中国の金文・甲骨文字のなかにも、雷の文字は車輪の音（当時は木の車輪であろう）をもって表現されていた（cf.劉編 1986 : 228-229)。それが図 10 である。

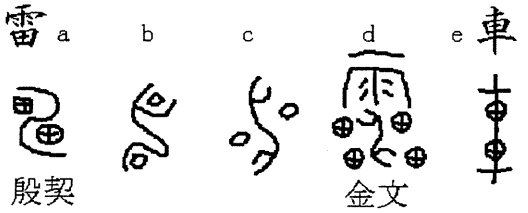


図 10　古代中国語の甲骨文

漢字の祖先として遡りうる最も古いものは、殷商晩期(B.C.1300-B.C.1000)に使われた「甲骨文字」だといわれている。そして殷商時代の青銅器に鋳込まれた銘文の文字、いわゆる「金文」は、「甲骨文字」とともに極めて重要な文字資料である(阿辻 1994)。

図 11 の a から d はすべて「雷」を意味する文字である。a、b、c は甲骨文字、d は金文である。図 11 の a から d の中の曲線は、雷雨の時の稲妻を意味し、小さな円や「田」のような模様は音の記号を意味している。ここで注目しなければならないのは、その「田」という絵は、実は車の文字の「車輪」の象形文字だということである（cf. 図 11 の e)。遥か遠い古代に、人間の聴覚では、すでに雷の音と車輪の音が結びついていたというのが興味深いところである。

現代中国語でも、雷の音を「轟隆」という音声で表現する。そして、轟くという漢字のなかにも、すでに三台の車が含意されている。

(39) 雷 聲　　轟隆　　作 響。
Lei sheng　　*HONGLONG*　　*zuo xiang*
thunder sound-TOP　ONO-　　make-V echo
「雷が HONGLONG と鳴った」

これまで見てきた「ころころ」の音に関する例文を、音の連想関係で図 11 のようにまとめる。

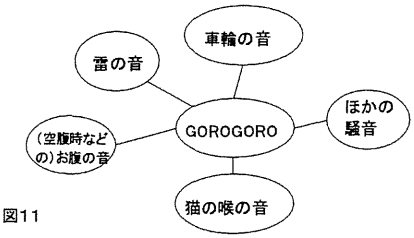


図11

図 11 が成り立つ根拠は、事物音と言語音の間に見られる音象徴的なメトニミー・リンクである。

3.3　視覚—動作と様態

3.3.1　「ごろごろ」— tr の動作にプロファイル

「ごろごろ」には、音を出しながら回転するイメージがある。

＜動作—回転しながら移動＞

(40) あそびの道具、ごろごろ引っ張っていくからごろごろくるま。

(41) スイカがごろごろ転がった。

経験基盤的に「ごろごろ転がる事態」に対して浮かぶスキーマが図 12 のように考える。

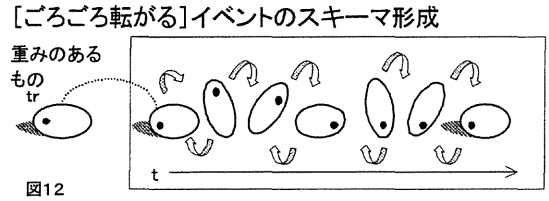


図12

そして、「ごろごろ転がる」事態の ICM は(42)となる。

(42)　＜ごろごろ転がる事態の **ICM**＞

前提条件：何か重みのある、転がりそうなものが存在する

前　　半：転がりだす

中　　盤：地面などと摩擦しながら音を出しながらゆっくり転がっていく

後　　半：徐々に減速する

終 了 点：どこかに停止する

この ICM を基に事態の諸側面を記述する。

(43) ＜ごろごろの ICM の諸側面＞

＜事態の音＞：摩擦音や連続的機械音

＜tr のかたち＞：丸みのあるもの、重みのあるもの

＜tr の動作＞：移動
＜tr の様態＞：回転、地面との接触、速度（ゆっくり）、重く、連続的に

この ICM を基準として、各用例を考察する。

3.3.2 「ごろごろ」— tr の様態にプロファイル

「ごろごろ転がる」tr は、(40)や(41)で現れる「もの」だけでなく、動物や人にも使われる。この場合、回転というより「寝転び」のほうが妥当であろう。

＜様態—回転—寝転び＞

(44) 個人の暮らしでは、和室、畳床という伝統様式とは関係なく、床にベッタリ、ごろごろと「くつろぐ」ことを求めているようです。

(45) ネコちゃんはカーペットの上でごろごろするのが得意技。

(44)と(45)の事態を(43)の諸側面と照合する。

表 8	「ごろごろ」の ICM の諸側面	(44)から(45)の「ごろごろ」の事態
＜事態の音＞	摩擦音、連続的機械音	無
＜tr のかたち＞	丸みのあるもの、重みのあるもの	人、動物
＜tr の動作＞	移動	移動無し
＜tr の様態＞	動態：回転、地面との接触、速度（ゆっくり）、連続的	動態：回転、地面との接触、速度（ゆっくり）、連続的

「ごろごろ転がる事態の ICM」と比較して分かるように、(44)と(45)は物理的な移動はないが、動物や人の寝転びのなかに「回転」「地面との接触」という様態が含意されているため、そこにプロファイルされ「ごろごろ」が寝転びという意味で使われるようになるのであろう。メトニミー・リンクに由来する意味の転義だと考える。

＜様態—回転—寝転び—無為＞

(46) 冬休みに家で一日ゆっくりごろごろできる日を 1 日取れるかな。

(47) 大金があればな～。ごろごろごろごろごろごろ…していられるんだけど。

(44)の＜ごろごろの ICM の諸側面＞と照合する。

表 9	「ごろごろ」の ICM の諸側面	(46)から(47)の「ごろごろ」の事態
＜事態の音＞	摩擦音、連続的機械音	無
＜tr のかたち＞	丸みのあるもの、重みのあるもの	人
＜tr の動作＞	移動あり	移動無し
＜tr の様態＞	動態：回転、地面との接触、速度（ゆっくり）、連続的	動態：寝転び、地面との接触、速度（ゆっくり）、連続的

「ごろごろ」が示唆する意味は、具体的な「寝転び」という動作からさらに抽象化される。具体的には、ごろごろのICMの中に地面との接触があり、「畳の上に横になって無駄な時間を過ごす；無目的にゆっくり時間を費やす」という意味になる。ここであえて「無為(無目的)」という用語を使う。この「無為」の事態から「怠ける」という含意が読み取れる。

この「無為」の意味はどこから来ているのだろうか。図12のスキーマのなかにtrの「ゆっくり、回転する様態」がプロファイルされ、そして寝転びの様態を連想し、そこから「何もしない/怠惰」の意味が生じるのではないかと考える。メトニミー・リンクに由来するものである。

具体的な動作を感じられない例文として(48)から(52)がある。

＜様態―連続性―多数量＞

(48) 人間の通る道に［犬の］糞がごろごろしていた。

(49) 柴犬ポチの写真、岩ごろごろの河原にて。

(50) 今帰仁の海にも、シャコ貝、サザエ、ウニがごろごろしていた。

(51) 巨人の松井が5億円、清原その他1億円以上稼ぐ野球選手はごろごろいる。

(52) 簡単に論破できる事実の記述の間違いがごろごろある。

(48)の犬の糞や(49)の岩は、確かに丸い物体の印象を引き起こす。丸い物がたくさんある。しかし、(50)から(52)の「ごろごろ」は丸い感覚というより「雑多」の意味が喚起される。多すぎて価値がなくなるという含意すらある。これらの例文を(43)と比較してみる。

表10	「ごろごろ」のICMの諸側面	(48)から(52)の「ごろごろ」の事態
＜事態の音＞	摩擦音、連続的機械音	無
＜trのかたち＞	丸みのあるもの、重みのあるもの	丸みのあるもの、或いは、人や抽象物
＜trの動作＞	移動あり	移動無し
＜trの様態＞	動態：回転、地面との接触、速度（ゆっくり）、連続的	静態：複数

ICMの＜かたち＞と＜様態＞（連続性/複数）が関連しており、以下の2点が挙げられる。

i.　形状によるメトニミー・リンク

ii.　停止点によるメトニミー・リンク

iに関しては、岩などのようなものに使われていたのを、そのtrの範囲が徐々に拡大していったという仮説である。iiに関しては、まさしく動詞「転がる」の意味と呼応する。『広辞苑』によると、動詞「転がる」の意味には回転しながら進むという意味のほかに「横向きに倒れる」「体を横たえる」「（テイルの形で）ありふれていてどこにもある」といった意味もある。この辞書の記述からみると、動態的な意味から静態的な意味にまで転義している。転義の由来は、おそらく動作の回転―進行―停止という一連の動きのなかに停止点(静

態)がプロファイルされ、「転がる」は状態の動詞となったのだろうと推測する。さらに、「ごろごろ」は事態の連続性を含意するため、事態の連続性と数量の連続性がオーバーラップして認知されるともいえる。

(53) a. 床に本が転がっている。(static)
b. 床に本がごろごろしている。(static)
c. ?床に本がごろごろ転がっている。(dynamic)

(53a)は本が一冊でも構わないが、(53b)は、複数あるという静的事態を意味している。「ごろごろ」の「連続性」から「複数/多数」という読みが生じる。ただし、(53c)の場合は、動きが喚起されるので、静的な様態の描写には不適切であろう。

これまで見てきた用例の中、「ごろごろ」の多義は、概ねメトニミー・リンクに由来すると考えてよいが、以下のように、メタファー・リンクに由来する意味もある。

＜様態―回転―変化＞
(54) カメラでも発表後外観がごろごろ変わる。

(54)に見られる「ごろごろ」の用法は、3.3.2 節で述べた CHANGE IS MOTION と同じ意味の拡張である。詳細は 3.3.2 節に譲る。

3.3.3 「ごろごろ」— tr の形状にプロファイル

最後に、容認度が非常に低いが、「ごろごろ」の新奇な用法を紹介する。「ごろごろ」は「丸いもの」という意味にもなる。

＜形状―丸い物＞
(55) しましまのごろごろ。春から初夏にかけて、三戸の台地はスイカでいっぱいになります。
(56) あみあみ（メロン）のごろごろ

新奇な用法であるが、理解不可能ではない。(55)の「しましま」は、スイカの模様のメトニミー、「ごろごろ」はスイカの形のメトニミーである。両方合わせて「縞々のある丸いもの」という意味になる。(56)の「あみあみ」はメロンの模様のメトニミー、同じく「ごろごろ」は丸いものを意味し形からのメトニミーといえよう。(55)と(56)は少し幼児語や宣伝のコピーのニュアンスも感じられる。

3.3.4　「ごろっ」— tr の動作にプロファイル

連続性のある「ごろごろ」に対し、一回性・瞬間性を表わす「ごろっ」という用法がある。

(57) 床に足を投げ出したり、ごろっと寝ころんだりする。

表 11	「ごろっ」の ICM の諸側面	(57)の事態
＜事態の音＞	摩擦音、機械音	時にあり
＜tr のかたち＞	丸みのあるもの、重みのあるもの	人
＜tr の動作＞	移動あり	移動無し
＜tr の様態＞	動態：回転、地面との接触、速度（ゆっくり）、瞬間的	動態：回転、地面との接触、速度（ゆっくり）、瞬間的

「ごろっ」に関して、一回性という意味があり、動きの「強調」にも使われる。ときには、「ごろごろ」に促音「っ」を付け加えることによって、転がっていく回転の動作を主観的にゆっくり転がるという意味で使われる。その場合、必ずしも「一回性」を意味するのではない［(58)］。イメージは創造的だという藤岡の説と合致する。

(58) ［ボーリング］床にボールを置いて転がすの。ゆぅ〜っくり、ごろっ…ごろっ…ごろっ…って、ボールが転がって… やっとピンに届いて傾くんだけれど、倒れない。

3.3.5　「ごろっ」— tr の様態にプロファイル

(59) まいたけが丸ごとごろっと入っています。
(60) 濃い目に味付けされたチャーシューブロックがごろっと入っています。
(61) 特にふぐ茶漬は、ふぐの身がごろっとしていてなかなか貫禄があるぞ。

表 12	「ごろっ」の ICM の諸側面	(59)(60)(61)の事態
＜事態の音＞	摩擦音、機械音	無
＜tr のかたち＞	丸みのあるもの、重みのあるもの	存在感のあるもの
＜tr の動作＞	移動あり	移動無し
＜tr の様態＞	動態：回転、地面との接触、速度（ゆっくり）、瞬間的	静態

(59)から(61)までの「ごろっ」は、動作の様態を表わすというより、むしろ tr の「存在感」を表わす。これも「ごろっ」のスキーマのメトニミー・リンクによる理解があって初めて意思の疎通が可能になる。

3.4　触覚

最後に、「ごろごろ」は触覚の領域にも使われる。

＜触覚―目の異物感＞

(62) 目がぼやける、ごろごろする、熱いような感じ。

(63) ハードレンズをつけて1時間もするとごろごろし始め、気になるので外して洗っている。

レンズと眼球の膜との間に入ったゴミは普通小さいものである。「ごろごろ」というのは、一般的に大きいものや重みのあるものを指す。ここでは異なる。この異物感の意味は、恐らく ICM のなかの、ものが地面に接触し摩擦音が生じる時の不快感に由来するものだと考えられる。

3.5 まとめ

ここまで考察した「ごろごろ」の例文をまとめてみると、表 13 になる。

表13 「ごろごろ」の使用領域分布

ドメイン		意味 及び 簡易スキーマ	具体例	比喩タイプ
聴覚	音	雷、車輪	・雷がごろごろ鳴った	メトニミー
視覚	かたち	重みのある、丸めのもの	・しましまのごろごろ ・一升瓶がごろごろ転がった	メトニミー
	動作	回転しながら移動、	・家でごろごろしている	メトニミー
	様態	寝転び 変化	・ごろごろ変わる	メタファー
	数量	多	・いい男はごろごろいない ・間違いがごろごろある	メトニミー
触覚	体感	異物感	目がごろごろする	メトニミー

表 13 の意味をメトニミー・リンクの観点から簡単に整理してみると、「ごろごろ」の多義の意味ネットワークは図 13 のようにまとめられる。

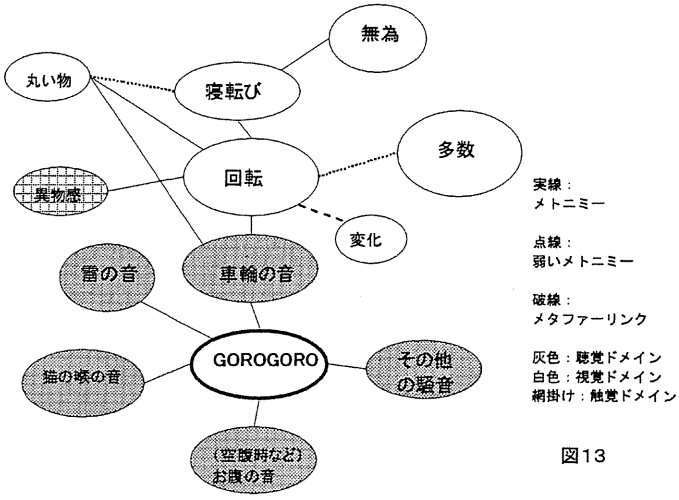


図13

4. 中国語のオノマトペ

オノマトペにおけるスキーマを検証するために、日本語のオノマトペだけでなく、中国語のオノマトペも考察する。4 章からは「ころころ/ごろごろ」に当たる中国語のオノマトペ「(圓)滾滾(yuan gun gun)」を取り上げ、考察する。

4.1 二十世紀の中国語（普通話）

中国語のオノマトペでは、「双声」と「畳韻」という技法が多くみられる。これらのオノマトペは、主に動詞や名詞、形容詞と結合して特徴的な一繋がりの表現として使われることが多い。これらの表現は複合メタファーとして、複数のイメージを喚起し、文章にいきいきとした効果をもたらす (注5)。(cf. 相原・韓 1990)

4.2 滾滾

本稿で取り扱った「ころころ」や「ごろごろ」に相当する中国語のオノマトペは、「圓滾滾（Yuan gun gun)」である。「圓」は円や丸いという意味であるが、「滾滾」はいきいきしたイメージをもたらすオノマトペである。まず、「滾」の意味を見ておく。

(64) 球　滾　來　了
Qiu　*gun*　*lai*　*le*
ball.SBJ　roll-come.VP　-PST
「ボールが転がってきた」

(65) 水　滾　了
Shui　*gun*　*le*
water.SBJ　boil　-PST
「お湯が沸いた」

「滾」に関して、従来の記述は表 14 である(注 6)。

『辞海』(1989)	『学典』(1995)	『中日辞典』(1992)
① 川が奔流たる様子。	① 川が奔流・急瀉する様子。	① 転がる。
② 物が旋転する様子。	② 液体が沸騰する様子。	② 出て行け！
③ 液体が沸騰する様子。	③ 物が旋転する様子。	③ 滾る、沸騰する。
④ (服などの)縁取りをする。	④ (服などの)縁取りをする。	④ (服等の)縁取りをする。

表 14

中国語の「滾」には、明らかに二つの異なるイメージをもつ。一つは「奔流/沸騰」であり、一つは「回転」のイメージである。それらの間の通時的な関連性については今後の課題とするが、共時的な観点から図 14 のようなスキーマが抽出できる。

[滾]のスキーマ抽出

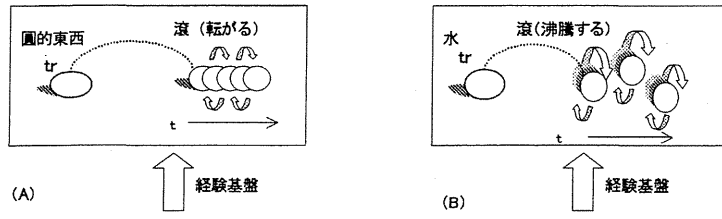


図14 〔球、石頭 etc.〕滾來了 〔水、湯 etc.〕滾了

まず、「滾」の二つの意味からそれぞれの ICM を見ておく必要がある。

(66) ＜滾：回転の **ICM**＞

前提条件：何か丸みのあるもの（tr）が存在する

前　　半：tr が転がりだす

中　　盤：tr が地面と接触し、回転し、連続的に転がっていく

後　　半：tr が徐々に減速する

終 了 点：tr が無目的にどこかで停止する

この ICM から(67)のように回転の諸側面を記述する。

(67) ＜滾：回転の **ICM** の諸側面＞

＜事態の音＞：摩擦音、連続的機械音

＜tr のかたち＞：丸みのあるもの

＜tr の動作＞：移動あり

＜tr の様態＞：回転、地面との接触、速度（速い）、連続的

一方、「滾」には、沸騰するという意味もある。

(68) ＜滾：沸騰の **ICM**＞

前提条件：流動体のもの［例：水］（tr）が存在する

前　　半：tr が徐々に熱くなり、沸きだす

中　　盤：tr が沸騰し、すごい勢いで沸いている

後　　半：エネルギーが切れない限り tr が煮えたぎりつづける。
　　エネルギーが切れると、徐々に温度が下がる
終 了 点：tr が平静な状態に戻る

(68)の沸騰する ICM から、(69)のように記述することが可能である。

(69) **＜滾：沸騰の ICM の諸側面＞**
＜事態の音＞：熱湯が沸きだす音
＜tr のかたち＞：流動体
＜tr の動作＞：沸きあがる、移動
＜tr の様態＞：泡の回転、温度（熱い）、速度（速い）、連続的

以上の ICM をもって用例を考察する。

4.2.1 視覚—tr の形状にプロファイル

次の用例はごく頻繁に用いられる。

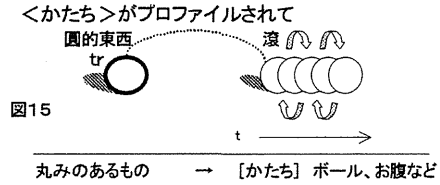
(70) 圓　滾滾　的　球
Yuan　*gun gun*　*de*　*qiu*
round　roll-roll.MIM　ball
「真ん丸いボール」

(71) 圓　滾滾　的　肚子
Yuan　*gun gun*　*de*　*duzi*
round　roll-roll.MIM　belly
「ころっと太ったお腹」

ボールやお腹は、固形である。このことから、(66)の ICM を喚起する。そして(67)の諸側面と比較する。

表 15	「滾」の ICM の諸側面	(70)(71)の「滾滾」の事態
＜事態の音＞	摩擦音	無
＜tr のかたち＞	丸みのあるもの	丸みのあるもの、小さくて軽い
＜tr の動作＞	移動あり	移動無し
＜tr の様態＞	動態：回転、地面との接触、速度（速い）、連続的	静態：回転無し

(70)と(71)は tr のかたちにプロファイルが当てられている。図 15 がそのプロファイルの仕方を表している。



4.2.2 視覚—tr の動作と様態にプロファイル

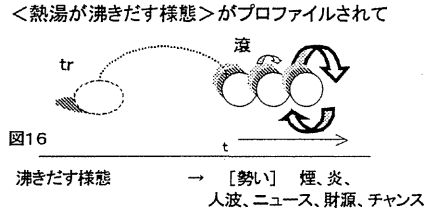
(72) 滾滾 濃 煙 / 滾滾 火焰 / 滾滾 土石流
gun gun *nong yan* *gun gun* *huo yan* *gun gun* *tushiliu*
boil-boil.MIM thick smoke boil-boil.MIM fire boil-boil landslide
「煙/炎がもくもくむくむく；奔流の土石流」

(73) {人潮/ 網絡 新聞/ 財源/ 機會} 滾滾 來
ren chao / wang luo xin wen / cai yuan / ji hui *gun gun* *lai*
{people tide / internet news / money source / chance } boil-boil.MIM come.V
「{人波／ネットニュース／財源／チャンス} が次から次へとやってくる」

(72)では、tr が煙や炎、土石流である。いずれも「流動体」である。(73)では、tr が人波、ネット上のニュース、財源、チャンスである。すべて「連続体」である。(69)の沸騰の ICM 諸側面と比べてみる。

表 16	「滾」の ICM の諸側面	(72)(73)の「滾滾」の事態
＜事態の音＞	熱湯が沸きだす音	無
＜tr のかたち＞	流動体	煙、土石流、ニュース
＜tr の動作＞	沸きあがる、移動あり	盛りあがる、移動あり
＜tr の様態＞	動態：泡の回転、温度（熱い）、速度（速い）、連続的	動態：回転、温度（熱い）、速度（速い）、連続的

(72)と(73)からは図 14(B)と一致する結論が得られた。その流動性と様態がプロファイルされている。



「滾滾」と共起する tr は {煙、炎、土石流、人波、ニュース、財源、チャンス} などで

ある。具体物か抽象物かを問わず、いずれも「連続体/流動体」のようなものである。

4.2.3 触覚

さらに、温度(熱)と関連して「滾滾」が使われる。例えば、「熱滾滾」「燙滾滾」等の表現である。

(74) 砂鍋　熱 滾滾　上　桌
Sa guo　*re gun gun*　*shang*　*zhuo*
sand pot.TOP　hot boil-boil.MIM　up.V　table
「テーブルに鍋料理がアツアツ」

(75) 燙　滾滾　的　茶
tang　*gun gun*　*de*　*cha*
extremely hot boil-boil.MIM　tea
「沸騰するほどアツアツのお茶」

(76) 熱　滾滾　的　情報
re　*gun gun*　*de*　*qingbao*
hot boil-boil.MIM　information
「ホヤホヤの情報」

(74)から(76)の滾滾は、すべて温度に関連して、熱いイメージがある。

表 17	「滾」の ICM の諸側面	(74)(75)(76)の「滾滾」の事態
＜事態の音＞	熱湯が沸きだす音	無
＜tr のかたち＞	流動体	鍋料理、お茶、情報
＜tr の動作＞	沸きあがる、移動あり	移動無し
＜tr の様態＞	動態：泡の回転、温度（熱い）、速度（速い）、連続的	動態：泡の回転、温度（熱い）

これらの用例は、沸騰の ICM の＜tr の様態—温度＞と関連がある。

4.2.4 「色」と関連して

この「滾滾」は色を表す語と同時に使われるときも、上例と同様の形式で現れる。ただし、この場合、「滾滾」は色に関して新たに意味を付け加えることはなく、両者はそれぞれの意味を保持している。

(77) a. 紅　滾滾　的　太陽
hong gun gun　*de*　*taiyang*

red roll-roll.MIM sun
「真ん丸い、赤い太陽」

b. 紅 太陽
hong taiyang
red sun
「赤い太陽」

(78) a. 綠 滾滾 的 果實
lü *gun gun* *de* *guo shi*
green roll-roll.MIM fruit
「真ん丸い、転がりそうな緑の果実」

b. 綠 果實
lü *guo shi*
green fruit
「緑の果実」

(77)や(78)では、「滾滾」を取り除くと、ただ(77b)「赤い太陽」や(78b)「緑の果実」という意味になり動態の感覚がなくなる。この「滾滾」は「回転する」というスキーマから由来する。

(79) a. 白 滾滾 的 湯頭
bai *gun gun* *de* *tang tou*
white boil-boil.MIM soup
「沸騰しそうな白いスープ」

b. 白 滾滾 的 煙霧
bai *gun gun* *de* *yan wu*
white boil-boil.MIM smoke
「もくもくむくむく上がる白い煙」

c. 白 滾滾 的 肚 皮
bai *gun gun* *de* *du* *pi*
white roll-roll.MIM belly skin
「肌白い丸いビール腹」

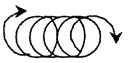
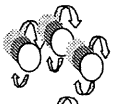
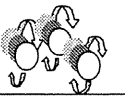
(79a)と(79b)のように、スープや煙に対して「白滾滾」が用いられるときには、沸騰するスキーマが働く。一方、(79c)のお腹に対して使われるときには、回転するスキーマが働く。

同じ「白滾滾」にも関わらず、tr が何かによって、認知主体がそれに刺激され、喚起するイメージが異なる。

4.3 まとめ

4 章で考察した「滾滾」に関する例文をまとめてみると、表 18 となる。

表18 「滾/滾滾」の使用領域分布

ドメイン		意味 及び 簡易スキーマ	具体例	比喩タイプ
聴覚	音	なし	なし	なし
視覚	かたち	丸めのもの	・圓滾滾的肚子 ・紅滾滾的太陽	メトニミー
	動作	回転 	・球滾下来了	
	様態1	沸騰 	・水滾了	
	様態2	(連続体)勢いよく次から次へ	・滾滾濃煙 ・人潮滾滾 ・機会滾滾	メトニミー
触覚	温度	非常に熱い 	・熱滾滾的茶	メトニミー

そして、「滾/滾滾」の多義的意味を整理してみると図 17 となる。

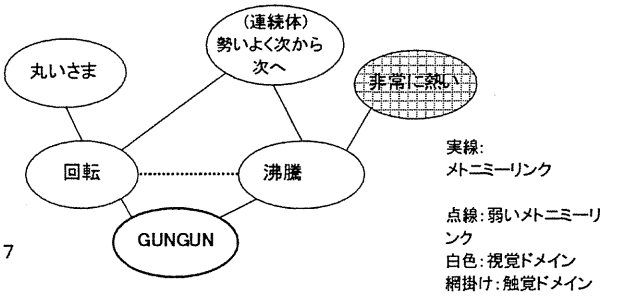


図17

中国語の「滾滾」もやはりイベントのスキーマを基盤として持っている。

5. “roll” の事例研究

「ころころ転がる」に当たる英訳は “roll” になる。“roll” は普通移動動詞として認識されるが、実際には音声としての意味もある。

リーダーズ英和辞典	Concise Oxford Dictionary
Vi: ① ころがる、回転する、横に転げ回る、歩	V: ① move by turning over and over on an axis

き回る ② （車に）乗っていく、（車両が）動く、進む、行く、スタートする ③ （船など）横揺れする、 ④ （波など）うねる、波動する、延びる ⑤ 次々と入ってくる、出てくる ⑥ (雷や太鼓などが)ごろごろ鳴る、轟く ⑦ 丸く［円筒形に］なる、巻かれる ボウリングをする Vt: ① 転がす、回転させる、目をぐるりと動かす、乗り物で運ぶ ② なぐって［撃って］転がす、打ち倒す ③ 巻く、巻いて作る、くるむ、丸める、 ④ 地面などをローラーでならす、伸ばす、 ⑤ 横揺れさせる、左右に揺らす ⑥ 朗々と言う、高らかに歌う、太鼓を連打する、巻き舌［顫動音 r］で発音する	a. turn over to face a different direction b. sway on an axis parallel to the direction of motion c. overturn d. throw a die or dice. ② (a vehicle or other wheeled object) move or cause to move along a. (of waves, smoke, cloud, or fog) move or flow forward with an undulating motion b. flow c. (of time) elapse steadily d. (of credits for a film or television programme) be displayed as if moving on a roller up the screen ③ (roll something up) turn (something flexible) over and over on itself to form a cylindrical of spherical shape ④ flatten (something) by passing a roller over it or by passing it between rollers ⑤ (of a loud, deep sound such as that of thunder) reverberate a. pronounce with a trill (r) b. folw mellifluously ⑥ rob a drunk or sleeping preson
N. ① 巻物、巻軸、軸、目録、名簿 ② 巻いて作ったもの、円筒形のもの ③ ころがり、回転、宙返り、船等の横揺れ、 ④ 太鼓の急速な連打、轟き ⑤ さいころを振ること、	N. ① a cylinder formed by rolling flexible material ② a rolling movement ③ a prolonged, deep, reverberating sound, ④ a very small loaf of bread ⑤ a roller used to shape metal in a rolling mill ⑥ an official list or register of names

表 19

“roll” はラテン語の “rota” に由来するという。

rota: 1. 車輪、円盤

3. 陶器製作用回転台、ろくろ

4. 責め具としての刑車

5. ころ、円筒

6. 輪、円、環、回転

7. 不定、変転

8. 二輪戦車

roto: 回す、回転させる、転がる、回転する

rotunde: 丸く、なめらかに

rotunditas: 丸いこと、円形、円滑、均斉

rotundo: 丸くする、かどを取る、完全にする (Lexicon Latino-Japonicum (1952)より)

ここで “roll” をオノマトペらしい表現として取り扱っていいのか、ということについて議論する余地があるが、一般的に英語のオノマトペには日本語のオノマトペのような明確

に選別できる音韻・形態的特徴が見られない。そのため、音韻的な基準に基づいてオノマトペと一般語彙を区別することは難しいとされている。そして、英語には murmur や babble、buzz のように擬音から動詞になった語彙も多数存在する。よって、ここで一つの可能性として「転がる」意味をもつ roll を取り上げてみる。

5.1　聴覚

面白いことに、roll にも音声的な意味がある。

(80) the roll of thunder　（雷の音）

車輪の転がる音をもって雷の音を描写する。これには、日本語のゴロゴロや中国語の「轟」「雷」と同じような発想が伺われる。ある意味では、音象徴の普遍性を垣間見ることができる。

5.2　視覚—tr の動作と様態にプロファイル

一般的に、英語の動詞は動作だけでなく、動作のマナーまで含む。つまり、roll には、motion と path が含意されているのである(Pinker 1989:182; Goldberg 1995:29)。

(81) ＜roll の ICM＞
前提条件：何か円形状や円筒状のもの（tr）が存在する
前　　半：tr が転がりだす
中　　盤：tr が地面と接触し、音を出しながら回転し、連続的に転がっていく
後　　半：tr が徐々に減速する
終 了 点：tr が無目的に、どこかで停止する

(82) ＜roll の ICM の諸側面＞
＜事態の音＞：摩擦音、機械音
＜tr のかたち＞：円形状や円筒状のもの
＜tr の動作＞：移動あり
＜tr の様態＞：回転、地面との接触、速度（速い）、連続的

(83) a. A coin rolled on the floor.（コインがころころと転がった）
b. The barrel rolled over.　（樽がごろごろ転がった）
c. He rolled in the bed.　（ベッドで寝返りをうった）

(83a)はコインの動き、(83b)は樽の動き、(83c)は人の動きを描写している。tr の大きさは小さいものから大きいものまであるが、その点は roll のスキーマに影響しないことが分かる。

動きとしては、tr 全体が回転しながら移動する。

(84) a. The car rolled along. （車が走っていった）
b. A fog rolled over the city. （霧が都市の上空を流れていった）
c. Centuries rolled on. （数世紀が流れ去った）

表 20	“roll” の ICM の諸側面	(84a)の事態
＜事態の音＞	摩擦音	機械音
＜tr のかたち＞	円形状や円筒状のもの	車輪、全体の一部
＜tr の動作＞	移動あり	移動あり
＜tr の様態＞	動態：回転、地面との接触、速度（速い）、連続的	動態：回転、地面との接触、速度（速い）、連続的

(85) She rolled the dough flat. （彼女はパン生地を平らに延ばした）

(85)においては、roll は麺棒の動きを意味し、回転しながら部分移動をもって、生地を延ばしていく。使役表現である。

5.3 視覚—tr のかたちにプロファイル

(86) a. a roll of printing paper （印刷紙一本）
b. a dinner roll （晩餐用のロールパン）

表 21	“roll” の ICM の諸側面	(86)の事態
＜事態の音＞	摩擦音	音無し
＜tr のかたち＞	円形状や円筒状のもの	円筒状
＜tr の動作＞	移動あり	移動無し
＜tr の様態＞	動態：回転、地面との接触、速度（速い）、連続的	静態

表 21 の比較から示唆されるように、(86)の roll の意味はメトニミー・リンクに由来すると考える。

5.4　まとめ

表22 “roll”の使用領域分布

ドメイン		意味 及び 簡易スキーマ	具体例	比喩タイプ
聴覚	音	雷	・the roll of thunder	メトニミー
視覚	かたち	円筒状のもの	・a dinner roll	メトニミー
	動作	回転しながら移動、	・a coin rolled on the floor ・the barrel rolled over	メトニミー
		＜使役表現＞ 生地を延ばす	・she rolled the dough flat	メトニミー
	様態	寝転び	・he rolled in the bed	メタファー
		変化・時間の経過	・centuries rolled on	

本稿では、“roll” のすべての意味を考察したわけではないが、その一部を観察した結果、“roll” の多義性はメトニミー・リンク/メタファー・リンクによって理解できるといえよう。

なお、ラテン語には「転がす」「回転させる」という意味で volvo という語彙がある。

volvo: v. a. 1. 転がす、回転させる、渦巻かせる、転がる
2. （書巻）ひも解いて読む
3. 転がし進める、転がし去る、転がし落とす
4. 包囲する
5. （転義）流暢に述べる

voluto: v. a. n. 転がす、（音）転がり進ませる、とどろき渡らせる、論究する、検討する
volutim: adv. 転がり回って、回転しながら
volutatus: n. 転がり回ること
volutatio: v. 転がり回ること、不安、動揺
volubititas: 回りやすいこと、回転、変りやすいこと、可変性
volubiliter: adj. 流暢に、なめらかに
volumen: n. 屈曲、湾曲、循環、巻き物、書き物、書籍

「転がる」から「変りやすい」への転義は volvo の関連語彙から伺うことができる。英語 “roll” には拡張しなかった意味（可変性）がラテン語の volvo に見られた。その拡張の方向性は「転がること」のスキーマに潜んでいるといえよう。

6.　おわりに

本稿では、認知言語学的なアプローチによりオノマトペの多義性を考察した。日本語・

中国語における意味的に似たオノマトペ（「ころころ/ころっ」「ごろごろ/ごろっ」「滾滾」）の使用例及び“roll”の使用例を概観してきた。経験基盤の立場に基づく理想認知モデル(ICM)を設定することにより、四者はともに具体的な様態から抽象的な事態までを描写し、表現自体が多感覚モードをカバーしていることが明らかになった。

従来のICM記述と異なり、本稿では、ICMの諸側面を詳述することにより、その多義性を支えるリンクを、メタファー・リンクとメトニミー・リンクと特定することができた。そして、オノマトペの多義的な意味は、認知モデルによりそれぞれのスキーマにまとめることができ、その背後には人間のプロファイル・シフト能力が大いに関連していることも本稿によって示された。また、本稿で示したオノマトペのスキーマ的図式は、全ての意味が記述できないが、国広(1997)が示唆するように図式によって語の本質な部分が捉えられたと思われる。

中国語の「滾滾」と英語の“roll”の事例との比較研究によって、多義性に対してスキーマ分析手法の有効性が見られた。同じスキーマから多義性が生じることが普遍的である一方、どの方向へ意味拡張するかは文化によって異なることも明らかになった。

表23　日本語・中国語・英語の＜転がるICM＞に関わるオノマトペの意味分布

	日本語	中国語	英語
語彙	ころころ/ごろごろ	滾滾（gun gun）	roll (動詞)
trの制約	固形物体、大きさに区別あり	固形物体/流動体 大きさに区別無し	固形物体/流動体 大きさに区別無し
聴覚	雷、車輪、蛙、笑い声	無	雷
視覚	形状表現あり 回転 固形物体の回転移動 変化のメタファー 複数/多数	形状表現あり 回転 固形物体/流動体の移動 変化のメタファー無し 数量表現無し	形状表現あり 回転 固形物体/流動体の移動 変化のメタファー 数量表現無し
触覚	異物感	無し	無し
注		温度表現と共起する。色表現とも共起するが「色」の意味を強化するものではない	

＊謝辞

本稿は、JCLA 第四回大会ワークショップでの発表の一部を修正・加筆したものである。この論文を発展させるにあたり鍋島弘治朗先生、菅井三実先生、会場で暖かいコメントを下さった国広哲弥先生にお礼を申し上げたい。また、青木真喜子氏から貴重なご意見をいただき、岩田真紀氏にも大いにご助力をいただいた。この場を借りて改めて感謝の意を申し上げたい。なお、不完全な論点はすべて筆者の責任にある。

【glossary】:

MIM　Mimic word

ONO　Onomatopoeia (sound)
PST　Past
SBJ　Subject
TOP　Topic
V　Verb

【注】：

1．賦、比、興という詩経の作法がある。賦とは、物事を直接陳述し感情を表す技法。比とは、A をもって B を言い類似性に基づくため、メタファーに近い技法。興とは、A をもって B の感情を引き起こす技法。例えば、<關雎>:「關關雎鳩，在河之洲。窈窕淑女，君子好逑」では、關雎という鳥が対となって鳴くということによって男女の愛情が暗示される。

2．Schank et al.によると、script には少なくとも三つのタイプがある：１）situational scripts　２）personal scripts　(e.g. a husband、a jilted lover)　３）instrumental scripts (e.g. lighting a cigarette、starting a car)

3．本稿で扱う日本語と中国語の例文は、出典を明記しない限り、すべてインターネットから採取した、実際の発話表現である。英語の例文は『リーダーズ英和辞典』（電子版）によるものである。

4．オノマトペには、具体性の高いもの（ころころ、かたかた等）から抽象性の高いもの（めきめき、くよくよ等）まである。ここでは、主に音を伴うオノマトペのことを指している。

5．双声と畳韻はオノマトペの造語だけでなく、詩歌の創作のなかでも使われ、修辞法として古くから重要な役目を果たしてきた。双声とは、二文字の語彙の中に、この二文字の子音が両方同じ子音であること（例：彷彿（fang fu））；畳韻とは、この二文字の母音および韻尾が同じ韻を踏むこと（例：逍遥（xiao yao））である。これらを合わせて「聯綿字」という。擬音表現は様々なタイプがある。語の構成要素が一音節のもの：噹（dang)、咚（dong)、呼（hu)、嘩（hua)、啪（pa)。語の構成要素が二音節のもの：叮噹（ding dong)、轟隆（hong long)、嘩啦（hua la)、噗通（pu tong)。三音節のもの：咕嚕嚕（gu lu lu)、嘩啦啦（hua la la）等。子音や母音の交替するもの：嘰哩瓜啦（ji li gua la)、唏哩嘩啦（xi li hua la）等。擬態表現に関して、V-AA 型：笑嘻嘻（xiao xi xi)、笑呵呵（xiao he he)。N-AA 型：火辣辣（huo la la)、水汪汪（shui wang wang）等。Adj-AA 型：黑鴉鴉（hei ya ya)、亮晶晶（liang jing jing)、圓滾滾（yuan gun gun）等。

6．中国語の「滾」は、辞書の記述からもわかるように、「你滾！（出ていけ)」のような命令文としても使われる。この意味も「回転する」スキーマから生じたものと思われるが、本稿の主旨（オノマトペ）とやや異なるため、深く言及することを控えた。その点に関する議論は、またの機会に譲る。

辞書

阿刀田稔子・星野和子 (1995).『擬音語擬態語使い方辞典』2nd ed.，創拓社.

相原茂・韓秀英編 (1990).『現代中国語 ABB 型形容詞逆配列用例辞典』，くろしお出版.

飛田良文・浅田秀子 (2002).『現代擬音語擬態語用法辞典』，東京堂出版.

野口宗親編著 (1995).『中国語擬音語辞典』，東方書房.

張拱貴・王聚元編 (1997).『漢語叠語詞詞典』，南京大学出版.

山口仲美編 (2003).『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』，講談社.

『学典』(1995). 2nd Ed.，台湾：三民書局.

『辞海』(1989). 上海辞書出版社.

『中日辞典』(1992). 小学館.

『リーダーズ英和辞典』(2000). 2nd Ed.（電子版）

『Concise Oxford Dictionary』(1999). 10th Ed. (電子版)

『研究社 羅和辞典（Lexicon Latino-Japonicum）』

主要参考文献

阿辻哲次 (1994).『漢字の文化史』，NHK Books.

Dewell, R.B. (1994). *Over* again: Image-Schema Transformations in Semantic Analysis, *Cognitive Linguistics*, 5-4, 351-380.

藤岡喜愛・徳田良仁・飯坂良明著 (1978).『イメージ・情報・宗教』，学習研究社.

――― (1983).『イメージ その全体像を考える』，NHK ブックス.

Goldberg. Adele E. (1995). *Contructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. The University of Chicago Press.

Hamano, Shoko. (1998). *The Sound-Symbolic System of Japanese*. CSLI&くろしお.

服部四郎編 (1978).『ロマーン・ヤーコブソン選集』vol. I，II. 大修館書店.

Jakobson, Roman. (1980). *Framework of Language*, Estate of Roman Jakobson. (池上嘉彦・山中桂一訳 (1984).『言語とメタ言語』，勁草書房.)

筧寿雄・田守育啓編 (1993).『オノマトピア 擬音・擬態語の楽園』，勁草書房.

Kita, Sotaro. (1997). "Two-dimensional Semantic Analysis of Japanese Mimetics," in *Linguistics*, Vol.35, pp.379-415.

喜多壮太郎 (2000).「ひとはなぜジェスチャーをするのか」,『認知科学』, Vol.7,No.1,pp.9-21.

楠見 孝 (1995).『比喩の処理過程と意味構造』，風間書房.

Lakoff, George. (1987). *Wemen, Fire and Dangerous Things*, The University of Chicago. (池上他訳 (1993).『認知意味論』，紀伊国屋.)

Lakoff, G. & Mark Johnson (1999). *Philosophy in The Flesh*, Basic Books.

Langacker, Ronald W. (1987). Foundations of Cognitive Grammar, Vol.1, Stanford University Press.

国広哲弥 (1982).『意味論の方法』，大修館.

――――（1997）.『理想の国語辞典』，大修館書店.
劉興隆　(1986).『甲骨文集句簡釈』，中国河南：中州古籍出版社.
呂　佳蓉（Lu, Chiarung）（2001）.「日本語のオノマトペの体系に関する一考察――事態認知の観点から――」，京都大学大学院人間・環境学研究科修士論文.
――――（2003a）.「比喩としてのオノマトペ―「ころころ」と「圓滾滾」」，JCLA 第四回大会 Workshop Handout.
――――（2003b）.「事態認知と日本語のオノマトペ」，関西言語学会論文集，第 23 号.
呂　叔湘　(1980).『語文常談』，北京:三聯書店出版.
鍋島弘治朗（2003）.「メタファーと意味の構造性――プライマリー・メタファーおよびイメージ・スキーマとの関連から――」，山梨正明編（2003）.『認知言語学論考 No. 2』，ひつじ書房.
仁田義雄　(2002).『副詞的表現の諸相』，くろしお出版.
大坪併治　(1989).『擬声語の研究』，明治書院.
岡本夏木　(1985).　『ことばと発達』，
苧阪直行編（1999）.『感性のことばを研究する』，新曜社.
Schank, R.C. & Abelson, R.P.（1977）. *Scripts, Plans, Goals and Understanding*, Lawrence Rrlbaum Associates, Inc.
田守育啓　(1993).「日本語オノマトペの統語範疇」，筧ら編(1993).『オノマトピア擬音・擬態語の楽園』，pp.17-75，勁草書房.
田守育啓・ローレンス・スコウラップ（1999）.『オノマトペ―形態と意味―』，東京：くろしお出版.
辻　幸夫編（2002）.『認知言語学キーワード事典』，研究社.
王　德春（1990）.『語言學通論』，江蘇教育出版社.
Werner, Heinz and Bernard Kaplan. 1963. *Symbol Formation: An Organismic-Developmental Approach to Language and the Expression of Thought*, Clark University Press. (柿崎祐一・鯨岡峻・浜田寿美男訳(1974).『シンボルの形成　言葉と表現への有機－発達論的アプローチ』，ミネルヴァ書房).
山口仲美 (2002).『犬は「びょ」と鳴いていた』，光文社新書.
山梨正明（1988）.『比喩と理解』，東京：東京大学出版会.
――――（1995）.『認知文法論』，東京：ひつじ書房.
――――(1998).「感性・身体性に根ざす言語」，『月刊言語』，Vol.27，No.6，pp.26-33.
――――（2000）.『認知言語学原理』，東京：くろしお出版.